

沖縄文化協会東京支部

2016年度

公開研究発表会要旨集

2016年9月24日（土）9：50～

法政大学ボアソナードタワー22階現代法研究所会議室

# 沖縄文化協会東京支部 2016 年度 公開研究発表会を開催するにあたって

沖縄文化協会東京支部公開研究発表会実行委員長 竹内重雄

本年度より、沖縄文化協会東京支部では、毎年沖縄で開催している公開研究発表会と同様の研究発表会を東京でも開催する運びとなりました。

振り返りますと、敗戦直後の昭和20年11月、東京に沖縄人連盟（現沖縄県人会）が結成され、その初代会長に伊波普猷氏が就任しました。昭和22年8月15日には、仲原善忠会長の下、沖縄人連盟内に沖縄文化協会が結成されると、翌年9月には沖縄人連盟から独立、沖縄学研究（主としておもろ研究）に専念することとなり、それ以来今日まで活動を続けてまいりました。

昭和23年11月比嘉春潮氏により機関誌『沖縄文化』が創刊され、昭和28年2月に第27号が刊行されて休刊。昭和36年4月に機関誌『沖縄文化』は外間守善氏の手で復刊され、昭和62年度（第68号）まで東京で刊行され続けました。その間、一貫して学術研究を追究してきたことにより、昭和44年度には『沖縄文化』は学術刊行物の認可を受けています。

その後『沖縄文化』は波照間永吉氏に引き継がれ、沖縄に移して刊行され現在に至っています。沖縄学研究は、この間足かけ42年、東京を中心に積み上げられてきたのですが、研究状況が整ったことにより、沖縄にその中心を移行したいという、長年の希望、念願がようやくかなったのであります。

一方、昭和54年から始まった沖縄文化協会賞は、昨年まで37回東京の地で行ってきましたが、本年度からはそれも沖縄に移行することとなりました。毎年11月後半に東京で行ってきた研究発表、講演会にあわせて、その授賞式が行われるようになったことから、研究発表はその受賞者3名が行うという形に変えました。研究発表の内容は高度なものとなり、注目に値する発表が毎回用意されましたが、本年度よりそのかたちの研究発表も、東京ではなくなるということとなりました。

今、その状況を目の前にして、東京での沖縄学研究所の進展を客観的に見る必要性が生じています。東京の大学、大学院、研究機関等では様々な機会を通して沖縄学研究が講じられ、研究されています。歴史、民俗、文学、文化・社会人類学、政治学、経済学、社会学等の学会、研究機関等で、沖縄学の研究発表をすることは可能ですが、「沖縄学研究」と銘打った共通の研究発表の機会が、東京で失われてしまったということに改めて気づかされました。

東京から沖縄に沖縄学研究を全面的に移行したことで、発展的解消がなされたといって喜んでいられないということです。これまでの研究史の流れをもう一度俯瞰することで、その研究がさらに進展して行く基盤、環境を、東京でも改めて打ち立てて行く必要があると感じています。

以上のことから、沖縄文化協会東京支部では、沖縄文化協会を母体に、フリーな立場の研究者にも広く呼びかけて、研究発表の場を提供し、沖縄学研究所の発展に寄与しようと考えてに至りました。

今回、研究発表するのは、別紙のように11名と、一日の発表としては最大の数で用意することができました。沖縄での研究発表会とはひと味違う、特徴のある発表内容が盛り込めるよう、関係者一同取り組んで参りましたが、今後さらにその点を向上させていく所存です。

今回をこの公開研究発表会の第一回として、毎年この時期に公開研究発表会を開催してまいりたいと願っています。どうぞよろしく願いいたします。 以上

# 沖縄文化協会東京支部 2016 年度 公開研究発表会プログラム

## 午前の部

- 9:50～10:00 開会の辞 沖縄文化協会東京支部公開研究発表会実行委員長 竹内重雄
- ① 10:00～10:30 伊野波優美 (沖縄文化協会) (司会、竹内重雄)  
山之口貌の詩篇における一人称の変移  
—初期詩篇から「ものもらひの話」までを中心に—
- ② 10:35～11:05 呉屋 淳子 (山形大学) (司会、得能壽美)  
創造される八重山芸能 —八重山諸島の高等学校における事例を中心に—
- ③ 11:10～11:40 古谷野 洋子 (神奈川大学常民文化研究所) (司会、得能壽美)  
波照間島の墓の民俗 —墓の概要と緊急時の葬法—
- ④ 11:45～12:15 源 園生 (沖縄文化協会) (司会、竹内重雄)  
古代南島の神祭り  
—奄美大島笠利町の「アマミコ祭」および与論島の「シニユグ祭」を通して—

## 午後の部

- ⑤ 13:15～13:45 宮平 盛晃 (沖縄国際大学講師) (司会、乾尚彦)  
雨乞い儀礼と動物の関連性について —琉球諸島における事例を中心に—
- ⑥ 13:50～14:20 春日 聡 (多摩美大、駒澤女子大講師) (司会、乾尚彦)  
伊良部島の豊年祭ユークイ祭祀の映像民族誌 —神歌を中心に—
- ⑦ 14:25～14:55 小山 和行 (沖縄文化協会) (司会、乾尚彦)  
「創世」オモロの解釈をめぐって
- ⑧ 15:00～15:30 三島 まき (学習院大学講師) (司会、松永明)  
琉球の精霊祭祀 —「タマ」「セヂ」を中心に—
- ⑨ 15:35～16:05 照屋 理 (名桜大学) (司会、松永明)  
沖縄・台湾間の人の移動と雑誌 —「おもろさうし」の研究姿勢を巡って—
- ⑩ 16:10～16:40 千葉 恭子 (香麗志安 和漢香文化研究所) (司会、得能壽美)  
琉球王国から江戸城に献上された香「香餅」
- ⑪ 16:45～17:15 久貝 典子 (沖縄県立芸術大学附属研究所) (司会、得能壽美)  
琉球・沖縄の藍の諸相 —鎌倉資料集を手掛かりにして—
- 17:15～17:25 閉会の辞 法政大学沖縄文化研究所長 中俣 均 教授

\*懇親会 17:30～ 法政大学ポアソナードタワー 2 5階「スタッフルーム」 (3,000 円)

① 10:00～10:30

## 山之口獏の詩篇における一人称の変移

—初期詩篇から「ものもらひの話」までを中心に—

伊野波 優美（沖縄文化協会）

山之口獏は、1930年代後半から1950年代にかけて中央詩壇で活動した沖縄出身の詩人である。その詩は「平易な語彙による語りに近い独自のリズム」を特徴とし、そのリズムは特に、自身の貧乏生活をうたった詩をユーモアに彩るものとして高く評価されている。

獏の詩の文体については、仲程昌徳氏（元琉球大学教授）や松下博文氏（筑紫女学園大学教授）をはじめとした多くの研究者によって様々な考察がなされてきたが、特に仲程氏は、獏が無名であった頃の初期詩篇を踏まえながら、この文体が確立される過程を詳細に論じている。しかし、その結論は、初期詩篇とは「似ても似つかない」文体へと変移していった獏の詩の確立期を「深く暗い闇」であると述べるに至っている。

このような「なぞ」の変移を遂げた獏の詩の文体を考察する際に、仲程氏は、獏の第1詩集『思弁の苑』（1938年）に収録された「ものもらひの話」を、その文体の確立された最初の詩として取り上げている。それは、本作が「巻尾の方から巻頭へと製作順にして置いた」詩集の最後を飾る詩であり、そのことから確立された文体としての最初の詩だと考えられるからである。

「ものもらひの話」は、関東大震災の罹災者恩典で父のいる八重山へ帰沖したものの、再上京を企てて単身那覇へ舞い戻ってきたばかりの自身の姿をうたった作品である。働きもせず友人知人の元を訪ね回ってはその日暮らしをし、周囲から次第に敬遠されていく自身の姿をうたったこの詩において、獏は、「怠惰者（なまけもん）」と自分に語りかける語り手としての自分を「俺」という一人称を用いて表現している。

ここで用いられている「俺」という一人称は、獏の4つの詩集に収められた197篇の詩において、「ものもらひの話」だけに用いられているものでもある。管見の限り、そのことに触れた考察は見当たらないが、自身の姿を客観的に捉えた詩において独自の文体を確立させたともいえる獏にとって、詩篇における一人称とは、その文体のみならず詩人としての方向性をも決定づける重要な言葉であると考えられる。そのことから、前述した「ものもらひの話」にみられる一人称の特徴は、独自の文体の変移を考察する上で一つの手がかりとなるように思われる。

そこで今回、初期詩篇から「ものもらひの話」までの一人称の変移をみていくことで、獏の詩における独自の文体の確立について改めて考察してみたいと思う。

② 10:35～11:05

## 創造される八重山芸能

—八重山諸島の高等学校における事例を中心に—

呉屋 淳子（山形大学）

近年、学校のなかで民俗芸能が積極的に教えられている。その過程に注目すると、民俗芸能が学校と地域社会の関わりのなかで新たに創り変えられ、新しい芸能を生み出していると指摘できる。本発表の目的は、現代を生きる人々がどのように八重山芸能を認識し、受け継ごうとするのかを、八重山諸島の高等学校で教えられるようになった八重山芸能から明らかにすることである。

発表者は、これまで民俗芸能を創造する場としての学校に着目し、そこで新たに生み出される民俗芸能を「学校芸能」と呼ぶよう提唱してきた。ここでいう「学校芸能」とは、次のような特徴もっている。①学校と地域社会が相互行為の過程で常に創造され、刷新されていく。②地域社会のほかに、他地域の民俗芸能や国の文化政策などの影響を受けながらも、地域社会の文脈のなかで展開している。③地域の民俗芸能の継承者を生み出している。ここでの継承者とは、演じる側だけでなく、芸能を支える「見る側」を含んでいる。

八重山芸能の成立は、近世琉球期の琉球王府による先島統治にまでさかのぼる。1609年、島津氏の琉球侵攻によって薩摩藩の支配下に置かれた琉球王府は、薩摩との関係を維持するために先島統治を強化し、八重山諸島に王府の役人を常駐させる制度を布いた。王府から派遣された役人たちは、島の政治を監視しただけでなく、宮廷芸能、つまり琉球古典芸能を島々に持ち込み、のちにそれを島の人々にも伝授した。

1879年の廃藩置県によって琉球が「沖縄県」になり、新しい時代を迎えるなかで八重山の民俗芸能は、舞台芸術を意識した鑑賞用の民俗芸能へと展開していった。八重山の人びとの歌や踊りに対する感覚や嗜好が変化した結果、新たなレパートリーを加えるなど、従来の芸能とは異なる形態の芸能も創出された。同時にこうした変化は、八重山の人々が琉球古典芸能との関わりを常に意識しながら、独自の芸能として八重山芸能を創造していく過程でもあった。

八重山諸島では、一世紀以上にもわたる近代化を経てもなお、八重山芸能への親しみが根強いばかりでなく、近年は学校教育においても八重山芸能が受容されている。特に、部活動のなかで教えられる八重山芸能は、学校の文脈のなかで実践されるため、地域とは異なる特色が顕著に現れている。また、その活動の場は学校内部にとどまらず、地域の祭りや全国規模のコンクール等にも広がっている。

本発表では、八重山諸島に所在する3つの県立高校の事例をもとに、学校が地域社会との連携を重視しながら、現代的な文脈のなかで生み出されている民俗芸能について検討する。その際、学校を主体とした八重山芸能の習得や成果発表といった一連の行為が、指導者のどのような取捨選択のもとでなされ、それを生徒たちがどのように理解し、芸能を継承しようとしているのかについて「学校芸能」の視点から明らかにする。

## 波照間島の墓の民俗

### —墓の概要と緊急時の葬法—

古谷野 洋子（神奈川大学常民文化研究所）

本発表は波照間島の墓の民俗として、同島の墓の概要と葬法（特に緊急時の葬法）について報告するものである。

波照間島には共同墓地はないが墓の集まった場所が何カ所もあり、現在そこに見られる墓の多くは亀甲墓や破風墓、あるいはそれらに類似した墓などである。同島は土地改良ですっかり様変わりした。畑の至る所にあった石積みの墓はほとんど潰されたが、今でも畑の隅や林の中に古い石積みの墓をみることができる。下田海岸の崖の窪みには古い骨の一部がみられ、かつては崖葬が行われていたことがわかる。また、家を囲っている石垣の隅の“でっぱり”は墓であったという伝承がある。さらに、家の近くにある石積みを先祖の墓と見做して祀っている家もある。特に名石と北の集落は集落内に墓が多かったと伝えられている。これらの多くは今でも行事のある日に祀られている。

墓の新築、復元などには土地の神に願い事をして、地の神に地代を払ってから墓を作った。旧家では6～7ほどの墓を所有している。また、嫁や婿にいても本人が希望すれば生家の墓に入ることができた。火葬になる前は洗骨改葬が行われていたが、現在は四十九日を目安に骨壺を墓の中に入れる。その際、墓の口開けでスサリ口を述べ、中央に置いてあった前の死者の骨壺を脇の壇に移動する。

ここでは墓の民俗の一つとして緊急時の葬法について取り上げる。東日本大震災でもみられたように、たとえ緊急時であろうとも人々は慣れ親しんだ葬法にこだわるものである。波照間島の人々はアジア太平洋戦争末期に軍命で西表島南風見に疎開しマラリアに罹患、帰島後も多くの死者を出し島民の3分の1が亡くなった。ムシロに包んだ遺体を歩けるものが交代で担いで集落の外に運ぶ毎日だった。墓に入りきらず、墓のそばに遺体を置き石を積んで上からススキを被せたり（フカマースという）、リン鉱石の採掘所跡の石を利用して遺体を覆ったりした。小さな子供の遺体は家の前の石垣の脇に置き石を積んだという。

しかし、遺体は島の北西部にあるサコダ浜に埋葬することが多かった。サコダ浜は各集落からそれほど離れていない。砂地であるため掘りやすかったし、町有地でもあったようだ。砂地では骨がきれいになるともいわれる。そして、この浜の東は竜宮の神に祈って島外で亡くなった死者を迎える地でもあった。埋葬した遺体は数年後に掘り返し墓に入れた。

緊急時の葬法では従来の石積墓の方法や石垣を利用した方法がとられ、たとえ埋葬せざるを得なくても死者を迎える浜に埋葬するなど島の死に関する伝承をも考慮した葬地の選択がなされていたことがわかる。また、同島では埋葬は動物をほおむるようだといって死者を埋めることを嫌うが、洗骨改葬の習俗からみればサコダ浜の埋葬は骨化するまでの一時処置ともいえた。そのため、人々の埋葬に対する抵抗感も少なかったのではないか。

## 古代南島の神祭り

—奄美大島笠利町の「アマミコ祭」および与論島の「シニユグ祭」を通して—

源 園生（沖縄文化協会）

奄美大島から沖縄本島と近隣離島にかけて、「アマミク」「シニグク」および類推される神の名が頻出する。その神名は島々の開闢神話や史資料に見出され、多くの論考がなされているものの、神名を冠した祭りの存在はほとんど認識されておらず、神の性格にも定説がない。

本研究では2014年から2016年にかけて行った調査から、奄美大島笠利町の「アマミコ祭」および与論島の「シニユグ祭」は、南島の開闢祖神「アマミク」「シニグク」の神名を冠した祭りであろうと推定し、琉球国の王権樹立以前における古代南島の神祭りにおける「国建て島建て祭祀」、言い換えれば「国見祭祀」ともいえるのではないかとの推論を試みるものである。

### ■「アマミコ祭」および「シニユグ祭」に共通する五つのキーワード

一、 宇宙開闢の神名・・・宇宙開闢の神名が明確に語られ、聖地に迎えられる。

・アマミコ祭:「海に赤い大島が漂っていた。アマミコさまが天降りられ、7つの立神を打ち込んで動かぬ如く成し賜った。」(大山幸良氏 1928年生、2014年7月・2016年6月調査聴取)

・シニユグ祭:「与論島始まいぬ 根地神様 世ぬ 始みんしゃあち賜ばあちやる 我根地ぬ 大神様がなし…今日はシニグ祭りがなしなやびてい」(市来大幸氏寿詞、2015年8月調査)

二、 高地・・・祭場は山頂や地域の高台で見晴らしの良い高地。

・アマミコ祭:大刈山山頂、古くは夜明け前に登拝。直径70cmほどの黒く丸い自然石が依代。

・シニユグ祭:崖地のパンタで神事後小高い稲田で根石にシニグ旗を立て歌舞弓矢を奉る。

三、 湧水・・・祭場は聖なる湧水地と一体にある。

・アマミコ祭:麓にはアモレウナグ(天降れ女・羽衣)伝説の「ソーズインゴ(精進井戸)」がある。

・シニユグ祭:祭りはウッコウ(大井戸・御井戸)から立ち上がる小高い稲田で行われる。

四、 稲・・・稲作の重要な農耕暦の中で行われ、シュギ(白米粉餅)新米・神酒などを供える。

・アマミコ祭:旧暦5月9日はシュギ・塩・神酒を供え、9月9日は新米・塩・神酒を供える。

・シニユグ祭:旧暦7月17日稲穂を飾り、刈残した稲田で弓矢行事、新米の神酒を供える。

五、 男の祭主・・・「ヲウナイ(姉妹)はサーダカ(精霊高)」とされる南島での男の祭祀は異彩。

・アマミコ祭:古くは集落の男性家長が登拝して祀った(大山幸良氏 2014年調査聴取)。

・シニユグ祭:男性年齢階梯の祭り。男の子による家打ち祓いなど。女性の関わりを忌む。

### ■古代南島の国建て祭祀と神名の考察

南西諸島の寿詞や神歌には同義的対語が多用される。「アマミク」への尊崇を高めるシノニムとして立ち現れた「シニグク」が、いつしか陰陽和合の調和と南島の基層にあった兄妹神話とも融合され、女神アマミク・男神シニグクの観念として定着、国建て祭祀の稲作儀礼に「男神シニグク」の神名が冠されたのではなかろうかと考察する。

## 雨乞い儀礼と動物の関連性について

—琉球諸島における事例を中心に—

宮平 盛晃（沖縄国際大学講師）

琉球諸島の雨乞いには、歌、踊り、火を焚く、水をかけ合う、綱引きなど、地域によって様々な方法が行われたという。対して、日本本土の雨乞いには、水神の池や淵に牛馬の首を投げ込むといった行為がみられた。原田信男による文献史料の研究でも、日本本土及び朝鮮半島の雨乞いに、動物の使用や供犠的行為がみられたことが明らかにされている。

本発表は、琉球諸島における雨乞いを対象に、動物及び供犠的要素の関連性を分析し、日本本土や朝鮮半島の儀礼との差異を明らかにした上で、その意味を考察するものである。具体的には、定期的あるいは臨時に行われる、雨乞い、雨願いと呼ばれるような、降雨を主眼とする儀礼を対象とする。農耕儀礼などの年中行事の中には、目的の一つに降雨が挙げられる場合があるが、それらすべてを雨乞いとして一様に扱うことはできないと考えられるため、本発表の対象には含めなかった。

これまでの調査で計 23 例の雨乞い儀礼を確認できた。事例群のうち、供物や共食のために動物が使われた例は計 5 例であった。動物の使用例は、周辺離島に比較的多くみられるものの、全体を占める割合は 2 割強と低いことが分かった。供犠的要素については、日本本土や朝鮮半島にみられたような主要部の放棄といった行為をはじめ、動物供犠に関連すると思われる行為や観念は 1 例もみられなかった。

以上、琉球諸島の雨乞いには、動物を使う事例が少なく、供犠的要素が皆無であり、雨乞いと動物供犠との間には目立った関連性がみられないことが分かった。しかし、日本本土や朝鮮半島といった広い範囲の雨乞いに供犠的要素が付随している事実や、数は少ないが動物が使われた例が沖縄諸島にみられた点を鑑みると、本来は、琉球諸島の雨乞いにも動物が供犠的に要されたのかもしれない。ただ、その決め手となる供犠的要素が未確認である以上、現時点で、琉球諸島における雨乞いは動物供犠とは把握できないと考えられる。

最後に、琉球諸島における雨乞い儀礼に供犠的要素がみられない意味を考察した。動物の頭を水神に投棄するのは、神を怒らせ、それが降雨につながるからとされる。琉球諸島でも、神を怒らせる行為が確認できたが、川に植物から作った毒を流すというもので、動物の使用はみられなかった（2 例）。

かつて、琉球諸島の村落では豚や山羊などの家畜が各家庭で飼われていることが一般的で、年中行事や人生儀礼など、家や村落レベル、様々な場面で動物が畜殺され、供えられ、食されてきた。肉は穢れの対象ではなく、ハレの日の貴重な御馳走であり、日本本土とは動物や肉に対する考え方が大きく異なっていた。琉球諸島において、動物の部位は神を怒らせるものではなかったのである。これらのことが、琉球諸島の雨乞い儀礼に動物の使用例が少なく、供犠的要素が皆無であることと関連していると考えられる。



⑥ 13:50～14:20

## 伊良部島の豊年祭ユークイ祭祀の映像民族誌

—神歌を中心に—

春日 聡 (多摩美大、駒澤女子大講師)

宮古島とその周辺群島（池間島、大神島、伊良部島、来間島）からなる宮古祭祀文化圏では、年間を通しおびただしい神事が行われる。そこでは沖縄本島のノロにあたるツカサンマという神女らを中心に、ニガイ（願い）と呼称されるさまざまな祈祷が行われる。ニガイとともに歌われる神歌に楽器の伴奏はなく、真摯な祈りそのものとして神々に捧げられる。

伊良部島には現在、北区の佐良浜部落（池間添・前里添）、東区の伊良部・仲地部落、中区の国仲部落、西区の長浜・佐和田部落の7つの部落がある。年間を通しもっとも多く祭祀を行う佐良浜部落では、ここ数年ツカサが選出されておらず、豊年祭ユークイ祭祀をはじめ部落における公的な神事は行われていない。

本発表でとりあげる東区の伊良部・仲地部落、西区の長浜・佐和田部落の各部落間におけるユークイの催行状況には、現在著しい違いがある。そうした問題意識を元に、本発表では2014年10月（旧9月戊申）に仲地、長浜、佐和田部落において発表者がユークイを撮影・録音した映像を参照し、ウタキを中心とした聖所・聖域のありかた、祭祀の時間・空間的なありかた、ツカサらの祭祀への関わりかた、神歌の内容とありかたを明らかにし、伊良部島における豊饒祈願の現状を報告する。

神歌としては、仲地部落の「サラパヤシ」（皿囃し）、「カンナーギアヤグ」（神名あげ綾語）、「豊年のアヤグ」の3曲をとりあげる。それらの朗唱の際には手拍子、挙手と揺動の動作、裳裾を持ち上げる動作、輪になっての旋回など、ユー（富貴）を集める意味とされる身体表現が伴う。

伊良部島東区の伊良部・仲地部落は明和の大津波により分村し、親子の関係にある。この両部落の祭祀組織は緊密な関係を持ち、年中行事も共通して執り行っている。例年のユークイは共催されることになっているが、発表者が調査した2014年は伊良部部落のツカサンマの父親が死去してから49日法要が終わっていないという事情により、ユークイは行われなかった。したがって、今回報告する仲地部落のユークイは伊良部部落と共催される本来の様態とは異なる単独催行による短縮版であり、本発表はその催行状況を報告できる機会となる。また短縮版であっても仲地部落に限定したニガイのために、長大な神歌が多く歌われる。ユークイの主旨は豊饒祈願、その一点である。だが、単純な主旨による主題の内訳には、もろもろの具体的な祈願がこめられている。そこに長大な神歌に仕立て上げた理由があるだろう。もろもろの祈願を確実にかなえてもらうためには、伊良部島の草木や岩の神々からはじまり太陽や月など宇宙全体の神々にいたるまで細大漏らさず招請し、祈願の数かずを具体的に歌い上げる必要があるのだ。伊良部島の祭祀儀礼は神事芸能と不離一体のものであり、神歌なくしては成立しないのである。

# 「創世」オモロの解釈をめぐって

小山 和行 (沖縄文化協会)

「おもろまぐ」 第十一巻は「ありままとのおもろまぐ」と発行されている。その第一巻目のオモロは次のようである。

### 第十一巻一 (一)

- ① 又大王や 天<sup>あま</sup> する<sup>す</sup> 勢<sup>せ</sup>に  
まけ せち 勢<sup>せ</sup>て ちよわれ
- ② 又大王や 天<sup>あま</sup> する<sup>す</sup> 勢<sup>せ</sup>に
- ③ 又大王や 勢<sup>せ</sup>に する<sup>す</sup> 勢<sup>せ</sup>に
- ④ 又大王や しつと 勢<sup>せ</sup>に する<sup>す</sup> 勢<sup>せ</sup>に
- ⑤ 又大王や 勢<sup>せ</sup>に 勢<sup>せ</sup>に ちよわれ
- ⑥ 又大王 (名) 勢<sup>せ</sup>に 勢<sup>せ</sup>に ちよわれ
- ⑦ 又大王や 勢<sup>せ</sup>に 勢<sup>せ</sup>に ちよわれ

(①-⑦印 引用者)

オモロ風注は「大王」として、「五皇天かなし美濃津の行幸」と記し、「意業(神、人皇)」は「大王の行幸」と説明している。それによれば「大王」は国王その人となり、文體本の脈のようは、「にもや大王」(ニルヤの尊号)とは歌をなくする。「天置」として「意業」は、「行幸之時、天置も震動するやうなものとあり」と記して、五一一から五一四までの、一巻のオモロにみられる語彙的連続性を考えれば、国王の久高島行幸の時に詠われたオモロであるといふことを強く推測させる。オモロ研究史の中では、このオモロから始まる連続のオモロについて、ニルヤ大王の出現、創世オモロと連続のないままに理解がなされてきたものと思われる。それは、オモロの風注を安易に整理してきたもので、無理できないものがあるのである。

右のオモロを国王の行幸オモロと察見すれば、二月の夜の初夜の終りに、首皇、与武原、久高島へと進む国王一行の盛大な行列がイメージできよう。新①節から新⑦節は、それを語らんだものと考えられる。

右の五一一巻のオモロにつづく五一二巻のオモロは、「又だ大王」が詠われているのであるが、オモロの連続性を考えれば、その「大王」も国王を指すものと十分に考えられるのではあるまいか。

### 第十一巻二 (二)

- |  |  |
|--|--|
| ① 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に | ⑧ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |
| てだ大王 <sup>てだ大王</sup>                                   | ⑨ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |
| 勢 <sup>せ</sup> に 勢 <sup>せ</sup> に ちよわれ                 | ⑩ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |
| ② 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に | ⑪ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |
| ③ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に | ⑫ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |
| ④ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に | ⑬ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |
| ⑤ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に | ⑭ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |
| ⑥ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に | ⑮ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |
| ⑦ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に | ⑯ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |
| ⑰ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に | ⑰ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |
| ⑱ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に | ⑱ 又 <sup>また</sup> 、らまの <sup>らまの</sup> 勢 <sup>せ</sup> に |

(十一巻二)

(①-⑱印 引用者)

右のオモロは、一般には「創世オモロ」として広く理解されてきたものである。但し、その理解のプロセスには大きな疑問を抱かざるを得ない。従来国王は、「皇氏系譜記」によれば、古琉球時代から近世前期にかけて、毎年、時代が下ってから開港し久高島へ行幸した。目的は〈家の初穂祭り〉を継続するためである。久高島において、相当期間、国王は滞在し、夏の初穂を祭することによって自らの生命力の更新を果だし、国の統治者としての力を獲得しながら、新たな世界の秩序を築くことと考えられる。その意味であるならば、まさに「創世オモロ」と呼ぶにふさわしい。久高島で舉行された、古琉球時代の〈家の初穂祭り〉のもつ意味について、あらためて考案する。

⑧ 15:00～15:30

## 琉球王府の精霊祭祀

－「タマ」「セヂ」を中心に－

三島まき（学習院大学講師）

琉球王府が、聞得大君を頂点とした神女組織を整えることによって、国家祭祀を行っていたことはよく知られており、このような信仰形態は、オナリ神に代表されるような女性の霊的優位ということで説明がなされてきた。しかし、なぜ女性が霊的に優位であるのか、その具体的な理由についての説明は、十分にはなされてはいないように思われる。

本発表では、琉球王府の精霊祭祀について、「タマ」「セヂ」などの外来魂に注目し、祭祀の調査事例や文献資料から検討を行ない、精霊祭祀の具体的内容とその背景にある信仰世界についての考察を行なった。

古代日本における外来魂「タマ」については、折口信夫による指摘があり、綾部恒雄は、日本の「タマ」とタイの「クワン」との比較考察を試み、仲原善忠は『おもろさうし』における「セヂ」についての詳細な報告を行なっている。

これらの精霊に関する従来の研究をふまえた上で、沖縄の「マブイ（魂）」や「セヂ」について考えると、沖縄の精霊祭祀は、女性によって行われる場合が多いことに注意される。「マブイ」や稲魂は、とても驚きやすく臆病な存在であり、「タマ」や「セヂ」も「マブイ」や稲魂と同様、デリケートな存在で、精霊祭祀に精通した女性が行なうのが適当だと考えられていたように思われる。

ユークイなどの「ユー」を迎える祭祀や、家庭や共同体における生命強化儀礼も、ほとんどの場合、女性神役や年長の女性によってとり行なわれる。

久高島のイザイホーも、三十歳という主婦として安定した年齢になって加入が認められ、「ウブティシヂ（御嶽のセヂ）」を受けて「タマガエー」（「タマ」に関係する呼称だと考えられる）になるのである。

このような観点から見ると、『おもろさうし』の「セヂ」の事例が、神女オモロに頻出し、オボツやニライの「セヂ」を招請することが、国家祭祀で重視されていることも、アジアの基層にある神霊観に基づくものであると納得できるのである。

また、『琉球国由来記』における聞得大君御殿での祈願は、御火鉢御前（火の神）を中心とした祭祀であり、「セヂ」を招請し、国王の長久安泰を祈る内容となっており、これらは、現代のヒヌカン（火の神）祭祀やヤシチヌウガン（屋敷の拝み）祭祀につながるものである。

本発表では、久高島、久米島、渡名喜島の祭祀の事例と『おもろさうし』、『琉球国由来記』における文献資料から、精霊信仰が、国家祭祀に展開していく過程を辿ることを試みた。琉球王府が解体し、百五十年近くたった現在でもなお、地域によっては、女性の神役が中心となった祭祀が、継続して行われてきたことの理由も、これらの信仰を通して考えると理解しやすいのである。

以上の課題について、映像資料や文献資料をもとに、具体的な事例をあげながら、琉球王府の精霊祭祀の特徴について明らかにしたいと考えている。

## 沖縄・台湾間の人々の移動と雑誌

－「おもろさうし」の研究姿勢を巡って－

照屋 理 (名桜大学)

キーワード：『南方土俗』、『南島』、『民俗台湾』、南島研究、オモロ

台湾が清朝から日本に割譲された 1895(明治 28)年当時、沖縄社会は、いわゆる“ソテツ地獄”と呼ばれる、非常に厳しい経済的疲弊に直面していた。

沖縄の人々にとって、「日本の領土になる台湾の植民地支配は、新しい就職市場と出稼ぎ先が開拓されたことを意味し」(又吉 2011:p402)、警官、土木人夫、潜水夫、行商人、「琉球女」等、続いて教員や弁護士、医師といった様々な業種の人々が沖縄から渡台した。1940(昭和 15)年の時点では沖縄からの渡台者数が 1 万 4695 人にのぼったとされる(同:pp403-407)。

1895 年以降、沖縄を含む日本各地から台湾へ日本人が陸続と流入していくのに連れ、日本人向けの新聞やラジオ、雑誌といったメディアが急速に発展してゆく。新聞は 1896(明治 29)年に『台湾新報』が創刊されたのを嚆矢に『台湾日報』、『台湾日日新報』が創刊され、ラジオは 1928 年に台北放送局 JFAK が放送を開始している。また雑誌の創刊も多く、台湾大学図書館所蔵目録によれば、同館および各資料室に所蔵する 1945 年以前刊行の台湾に関する日本語の雑誌は 219 種が収録されている。

琉球・沖縄研究の論考が掲載された台湾の雑誌『南方土俗』(1931 年創刊)、『南島』(1940 年創刊)、『民俗台湾』(1941 年創刊)も、戦前台湾において創刊された雑誌として挙げられる。

この三誌には、多数の沖縄県出身者による沖縄および台湾民俗・文化についての論考のほか、沖縄県出身者および沖縄県以外の出身者による研究に関する対談等も掲載されている。沖縄出身者は、植民地となった異郷台湾をどのように見たのだろうか、あるいは沖縄県出身者と沖縄県以外の出身者とは、台湾でどのような学問的邂逅を果たしたのか。

本報告では、このような問題意識に対する一試論として、『南方土俗』、『南島』、『民俗台湾』、南島研究、オモロ等のキーワードから考察を試みてみたい。

### 【引用・参考文献】

又吉盛清 2011 「第 4 節 台湾」『沖縄県史 各論編 第 5 巻 近代』(沖縄県教育委員会)

## 琉球王国から江戸城に献上された香「香餅」

千葉 恭子（香麗志安 和漢香文化研究所）

「香餅（こうへい・こうべい）」と称される香は、固形状の印香と混同されるなど不明な点が多い。過去には京都・鳩居堂四代・熊谷直恭氏（1783～1859年）が「黒香餅」を復元したと伝えられているが、復元前の詳細は今日に至るまで追及されておらず、復元後の状況も把握できないままであった。

本発表では日中両国における香餅の存在と実態に焦点を当て、時間軸に沿って探索することで香餅誕生と発達史を明らかにし、併せて印香との関連、区別を指摘する。

日本における香餅の初出は対外関係資料集『通航一覧』に見出すことができる。琉球王国が江戸城へ献上した目録の中にあり、輸入品、特産品、香料や線香類に並んで記されている。献上品とされる以上、他に類を見ない価値の高い品であることは疑いない。香餅の献上は途切れることはあったものの二百年程続いた。

香餅の製作方法は明・周嘉胄『香乘』に掲載があるため形状、性質は判明しているが、琉球の香餅と同一のものか現段階では実証できない。しかしながら、『香乘』が明・崇禎14年（寛永18年、1641年）に刊行されたまさに三年後の正保元年（1644年）に琉球が江戸城に香餅の献上を開始したこと、加えて二百年もの長期間、献上し続けた経緯から鑑みても、明から情報を得て琉球で製作した可能性は高い。鳩居堂による復元は恐らくこの献上の記事が途絶えてからのことと思われる。その後は香舗への取材によって、昭和初期の商品目録に各種香餅を確認できたため、琉球の香餅との関連を考察した。

『香乘』記載の香餅の調合法からその発達史を分析することによって、初期は香炭団の役目を担う焼香用香餅として工夫され、やがて純粹な香として発達したことがわかった。遼代の出土品からは初期の香餅の実態をつかみ、明の文人の著作からは当時人気のあった香餅を挙げた。この香餅は香り、色、形、紋様、艶、弾力があるタイプである。香餅の発達史を解明することは、香丸（練香）から線香への道のりを一部埋めることにもなるため極めて価値が高い。さらに、印香の誕生について、日本における「炭団」の発明と関連が深いことを推測した。

琉球は明と日本を間接的につなぐ役目を果たしていた。琉球の香餅やその他の香造りは視点を変えたと、明と日本を文化的にも橋渡ししていたことを示している。しかも、琉球の香造りの技術は江戸幕府に誇れるものであった。沖縄は第二次世界大戦で多くの線香工場が被災したため戦前の香造りの実態が不明瞭になっているが、香餅など琉球がかつて造っていた香を明らかにすることは、沖縄の特産品再興に一石を投ずるものとして意義があると考えている。

## 琉球・沖縄の藍の諸相

—鎌倉資料集を手掛かりにして—

久貝 典子（沖縄県立芸術大学附属研究所）

故鎌倉芳太郎氏（以下敬称略）の残したノート資料全 81 冊の内容は、沖縄県立芸術大学附属研究所編集・発行した『鎌倉芳太郎資料集』ノート篇「美術工芸」（第 1 巻）、「民俗・宗教」（第 2 巻）、「歴史・文学」（第 3 巻）で確認可能である。

同資料集は、東京美術学校図画師範科出身の鎌倉芳太郎が、「琉球芸術調査」と命名した沖縄調査のノート資料を一次資料として、沖縄県立芸術大学附属研究所が翻刻・編集・刊行事業を行ったものである（波照間永吉代表）。同資料集は各巻がそれぞれ「美術工芸」「民俗・宗教」「歴史・文学」の主題に沿って編集されているが、本来の「琉球芸術調査」に表象されるような、鎌倉芳太郎の芸術家的視点が全巻を通して確認できる資料集ともなっている。特に鎌倉の収集した記録の中から染織に関する説明を拾うと、多様多彩な近世・近代・現代にまたがる琉球・沖縄の染織の諸相が構築できる。

染織に関する記録の大まかな内訳は、時代区分的には近世・近代・現代（戦前）、内容的には首里王府編纂・地方文書・家譜・フィールドメモ（スケッチを含む）等に区分される。それらの記録の中から染織工芸に関する用語を抽出すると、a.原料の名称、b.布の名称、c.衣服の名称、d.道具の名称、e.工程の名称、f.服飾品の名称、g.人の名称（役職等）に区分できる。その中から a 項目の藍について、資料集を参照し、また、現在までの研究結果を加え、報告する。

最も古い藍の史料は、管見の限りでは『李朝実録』1479 年の与那国の記録まで遡る（嘉手納宗徳編『李朝実録琉球史料』1972）。

「一、無麻木綿。亦養蚕。唯織苧為布。作衣如直領及襜積。袖短而潤。染用藍青。…」つまり「一、麻木綿無し。養蚕もまた。唯苧を織りて布を為る。作衣は、直領の如くして領及び襜積なし。袖は短くして潤し。染むるに藍青を用ふ…」これらは金非衣、李正、姜茂らの観察した藍の諸相である（成宗康靖大王実録 10 年）。

近世の藍は、『八重山島農務帳』「藍仕立製法之事」で確認されるように、庶民の衣料用、貢納布用染料として重要な栽培植物となった。

「製法之儀 藍壺ニ生藍ひろけ入小木ニ而古葉不浅根おそへ猶又右壺真中並左右三ヶ所ニ三四本宛大おそへ木組調其上石おそへ左候而水分ハ右木より夏七八寸冬は三四寸程上入候て春二三日秋四五日程ニ而相朽候」つまり「藍壺に小木の生藍を広げ入れ、壺の真中と左右三箇所におそへ木 3-4 本ずつを組んで蓋をし、その上に石の重しを置くと木や石の圧力で容積が小さくなる。その上に大おそへ木より夏場は 7-8 寸、冬は 3-4 寸ほどの水を入れると、春は 2-3 日、冬は 4-5 日で発酵する」のである（『日本農書全集』43 巻）。

以上の例のほか、鎌倉芳太郎が収集したノート資料研究より、藍の諸相というテーマに絞って報告する。